

## 巻頭言

\*

# 古希を迎えて



毛利 忍

早いもので、横浜市民病院を定年退官してから5年になる。定年後はとても開業をするような能力はないので、あまり仕事をせず、のんびりする心算だったが、あれこれ仕事が入り予想外に忙しくしている。殆どが半コマずつの勤務なので、移動にも時間がかかる。逆に言えば、適度に体と頭を使うので、健康によいかもかもしれない。

大学紛争が吹き荒れた時代に学生生活を送り、卒業後2年研修して横浜市大医学部皮膚科に入局した。外科が「うちには女性用ロッカーは無い」と公言する時代であった。それに対し皮膚科は医局員が少なく親密であり、居心地がよかった。しかし数年で夫の転勤に従い金沢に行くことになった。金沢大学の皮膚科医局に入れてもらい、診療の一端を担わせてもらった。この頃は「横浜から来た奴は出来が悪い」と言われたくなくてかなり頑張った記憶がある。特に福代教授のベシユライバーをしたのは勉強になった。現症の記載が、実に簡にして要を得ていた。しかし子どもが小さかったので、よく保育園から電話がかかり、「熱を出しているから迎えにこい」といわれた。「何しに病院に来ているんだか」と陰口を叩かれたものである。この頃はパワーハラスメントという言葉さえなかった。

それでも仕事の的には、落ち穂拾いみたいな形で症例を集め、JDに数編投稿し、それなりの評価を得たので、満足している。しかしまたしてもパワハラで、「電動タイプ（ワープロもない時代だった）で原稿を作るのは凶々しい。タイプは最終稿を書くときのみ使い、それまでの下書きは紙と鉛筆を使え」などと言われたものである。全く隔世の感がある。

10年経って横浜に戻ってきたが、もう人事は決まっていたので当然勤務先はない。非常勤的常勤みたいな形で暫く働いていたが、林先生が開業に踏み切った後釜になれと永井教授に言われ、栄共済病院

に就職した。そして学位も取得した。永井先生が突然教授を退官されることになったのであせって書いたものである。タイムリミットがあったのがよかったのかもしれない。栄共済は小さいが働きやすかった。ここではじめて診察したPityriasis rubra pilaris 成人古典型は記憶に鮮やかである。紅皮症状態であったので入院させ、ステロイドの点滴をしたが全く効果がない。そうこうするうちに膝蓋がざらざらしていることに気づき、ひょっとしてと思い教科書をめくると、何と成人古典型として典型例であった。この頃はチガソンもネオオーラルもなく、外用だけで乗り越えたが、いい勉強になった。

栄共済病院に4年近く勤務して、ひょんなことから市民病院に移ることになった。加藤先生が市民病院の院長になり、院長業務が多忙で外来が手薄になったことも一因である。市民病院では加藤先生を入れずに3人態勢だったので、栄共済の時より大きい手術もできるようになり、また形成外科が手伝ってくれるようになってかなりの手術ができた。「大学に回すな！」を口癖に頑張ったものである。AIDSが出現したり、分子標的薬ができたり、この頃の医学の進歩は目覚ましく、どれも皮膚科としてやれること、やるべきことが多数あり、ここで病院に皮膚科にも一目置かそうと思い、いろいろな委員会にも参加した。しかしやはり皮膚科は儲からないという病院の認識は変わらなかった。あっという間に22年経って定年退職である。

医者は年をとっても働く場所があるのが幸いである。ずっと勤務医だったので収入は大したことがなかったが、患者さんから受けた経験は本当に財産である。少しでも外来を通して患者さんに、教育の場を通して若い先生方に恩返しをしたいものだと思う。